

文系学生の学習意欲を高める教育

森 靖雄

もり・やすお
日本福祉大学・経済学部



□ はじめに

私は、「文系学生の学習意欲を高める教育」について発言させていただけます。このシンポジウムで私に発言の機会を与えていただいたのは、私が『大学生の学習テクニク』（大月書店）という本を出しているからだと思えます。この本は五年ほど前に出したものですが、おかげで今もなおよく売れております。それだけご活用いただいている学校が多いことだと思えます。

大学教育に関する本としては、もう一冊「経済学教育学会」の編集で『大学の授業を作る―発想と技法―』（青木

書店）という本を出しています。「経済学教育学会」は、十数年前から大学教育の実践について交流しあっている五百人ほどの学会ですが、この学会がこれまでの報告の中から選んで、まとめたものです。私はそこで二つの章を分担しましたが、その一つが「学習基礎技術の講義と効果」というタイトルです。それは大学新入生に「ある種の教育」をした方がよいのではないかとという提案で、その自身は今回覧している『大学生の学習テクニク』のような教育をしたらどうかという内容です。

もう一章分担当したのは、多くの大学が抱えているゼミ活動がうまくいかない悩みに答えようとした内容です。橋本

先生からも、「いかに生徒をいきいき学ばせるか」というお話がありました。大学でも同じことです。私のゼミでは「どうやって自ら興味を持たせるか」を重視して、ある種の仕掛けを含んだゼミ活動が続けていますので、その経験をまとめた内容です。今日はゼミの方は時間があればするということ、主に新入生について発言します。

「鉄は熱いうちに鍛えよ」という言葉がありますが、最初にやり損なうと四年間それを引きずりますので、入学当初のところで大学生としての軌道に乗せる方法を中心にお話しさせていただきます。

もり・やすお・一九三五年、愛知県生まれ●主な著書に『徳川時代における市場成立の研究』一宮史談会 一九六四年、『大阪工業の地域分布』大阪府立商工経済研究所 一九八一年、『やさしい調査のコツ』大月書店 一九八九年、『国際化時代の中小企業経営』愛知県中小企業研究財団 一九九四年、『阪神大震災・被災業者の復興に伴う問題点と提言』全国商工団体連合会 一九九五年、『大学生の学習テクニク』大月書店 一九九五年、『地域調査入門』自治体研究社 一九九五年、『現場からつくる地域政策入門』自治体研究社 一九九六年

□ 『大学生の学習テクニク』執筆の背景と経過

さきほど言いましたように、五年程前に『大学生の学習テクニク』という本を出しましたが、この本は一九九〇年度から一九九四年度までの五年間、日本福祉大学の一年生ほぼ全員に対して、「総合科目」の一つとして講義した内容がベースになっています。

最初の年は「情報収集の手法」というテーマで、総合科目の半年講義をリレー講義の方式で始めました。そういう教育を総合科目として取り上げること自体が、私の意見も多少入って実現したものです。二年目からは、外部の先生をお願いしなくても本学の教員だけでやれるということになりました。三年目まで三人の教員が手分けして半年十二時間を受け持ちました。その後は、他の二人の先生の職務が変わり、ほかにこういう講義をして下さる方も見つけにくかったので、最後の二年間は「学習方法論」という名前が私が一人でやっておりました。

この講義でどういうことを教えていたのかは次の□で申し上げますが、大学の講義としては異常と言えるほど評判が良くて、たくさん学生が聞きにきました。出席はとりやうがなくて全く取りませんでした。一言で言えば「あの

講義だけは休むと損だ」ということです。最初の講義は珍しさもあっていっぱいになり、二回目からは文字通り大教室からあふれる状況になりました。回を重ねてもほとんど学生が減らないという講義だったのです。

それで、これは福祉大以外の学生にも同じようなことを教える必要があるのではないかと考えて、九五年の二月にこの本を発行しました。ただ、皮肉な話ですがその翌年度に私が留学することになり、二年間は講義できないことになりました。加えて同じ年度から私が所属する経済学部に新しい学科を作ることになりました。新学科を作るには全科目に教員を配置しなければ文部省がOKを出しません。そのため総合科目というのは作れないということになりました。私自身は中小企業論が専門で教育学ではありませんし、結局、担当する教員がないということで廃止になりました。最近改めてこうした教育の必要性が強まっています。が、私自身は来春定年で日本福祉大学を退職しますので、その後どういふことになるのかわかりません。

三 私基礎教育の考え方

この本を作ったのは、我々は学習のために必要な基礎技術を教えていないのではないかとという疑問からです。これ

は後ほど別の場面で大変議論になったという話をしますが、私はかねてから「学習効果を上げるためには、基礎的な学習技術を教えた方がいい」と考えていまして、その意見が通って総合科目で「情報収集の手法」のちには「学習方法論」という科目が実現したわけです。

これは、例えば、コンピュータは非常に便利がいいし、ある意味で面白いものです。しかし、あれの操作を何も教えないで、ただ「これは面白いよ。計算が簡単にできるよ、インターネットもできるよ」と言っても、それだけのヒントで使いこなせる子はごく僅かで、多くは「何だかわけがわからん。スイッチ入れても次何やったらいいかわからへん」ということで、結局投げってしまうだろうと思うわけです。そのため高校や大学では、コンピュータに関しては何も必要感が痛感されて、今、コンピュータ導入教育が手順よく行われています。だから、コンピュータについては基本的な問題は解消されていますが、実はそのほかにも大学のあらゆる科目についても、それと同じことが起きているのではないかと考えているわけです。つまり、我々は講義の形でコンピュータにあたるようなものを与えようとしている。しかし、その使い方はほとんど教えていないのではないか。それが学生の学習意欲をそぐ要因になってい

るのではないかと思うわけです。

実は、アメリカでは、こういう学習技術について何冊も本が出ているようです。それが日本では、特に日本の文系では、なぜそういうことが行われてこなかったのか、あるいは軽視されてきたのかという原因については、私は二つ理由があったのではないかと考えています。

一つは、苦勞して覚えないと身につかない、何もかも教えたらダメだという考え方です。これは「何もかも」というところに意味がありまして、何もかも教えるということだと、何もかも教えたなら駄目だということははっきりしています。それがいけないことだと言って基礎技術をすべて否定してしまう、一種の精神主義、努力主義に陥っているように思われます。苦勞すること自体に意味があるという考え方ではないのかと思うわけです。

それからもう一つ。多くの大学教員が気づかず陥っている問題として、教員の多くは自分の体験としてそういう技術をいつの間にか習得したという経験者が多いように思います。実は私から見ると、大学教員というのは一種の研究マニアでして、新しい方法や理屈を考えることが好きな人です。そうした研究好きであるという非常に特殊な経験を、あたかもそれが普遍的な事実だと誤解しているの

はないか。その結果、「学習の方法などわざわざ教えなくてもいい。自分も誰にも教わらずにやってきた」ということで、本人が気づかないうちに精神主義・努力主義に陥ってしまったのではないかと思うのです。

そういう考え方では駄目だというのが私の考え方です。その理由は、私は六十五歳になっていますが、我々が学生時代には、こういう学習技術は様々な内容を含んで先輩から教わってきました。先生の上手な動かし方とか、学校の利用の仕方とか、要領のいい試験の受け方とか、必ずしもカンニングのような特殊な技術だけではなくて、上から下へと伝えられていました。我々も、一生懸命聞き出しました。しかし、今はそういう縦の伝承というものがほとんど行われていません。大学の中で比較的共通した縦関係は、運動部を代表とするサークルです。ここでは、先輩・後輩の関係が非常に強固に続けられています。現在、大学の中でサークルにのめりこむ学生というのは、多くの場合、我々が教えようとしている、あるいはやらせようとしている勉強とは遠い位置にいる学生が多いと考えられます。勉強が楽しくて学校に来るといよりは、サークル活動が楽しくて学校へ来るという学生たちが少なくありません。

そのこと自体を問題にしているのではありませんが、そ

ういう環境の中で学習の技術がうまく伝わっているとは思えません。少なくとも我々が期待するような学習方法の伝承は非常に希薄ではないかと思えます。このへんが我々の学生時代とは随分変わってきていると思えます。

さらに、学生生活の時間配分が大きく変化しています。昔は、授業の合間にアルバイトをするという考え方が普通でしたが、今はアルバイトの方が大事で、アルバイトと授業を並列ぐらゐに考えています。予定外のゼミ活動などを提案するとすぐく反対する学生がいて、アルバイトの方を優先させていると判断される学生さえ珍しくありません。多くの学生は、一週間の何日かはアルバイトのために授業を外して、我々が期待するほど、大学へ来ているから勉強してくれるんだというふうにはなっていない。

それにもかかわらず「勉強の仕方」を教えないために、結局我々が期待する「学習の面白さ」を知ったり興味を持つたりする前に卒業期を迎えてしまう。その結果としては、我々が一生懸命努力するにもかかわらず、なかなか学習効果が上がらないのではないかと思うわけです。そこで、私たちが先輩から伝承してきた学習技術を後輩に引き継いでいく、加えて私も研究マニアの一人ですから自分でも絶えず改善工夫をしてきました。それらをまとめて、いわば先

輩として後輩に書き残しておこう、書き残しておけば必要な人たちが利用してくれるのではないかと考えて作ったのが、この本であるわけです。

実は、この本が出て半年ほど経った時に、『リクルートカレッジマネジメント』という雑誌の編集部から連絡を受けました。私もこのとき初めて知った雑誌ですが、タイトルによると「大学短大の理事長、事務局長用雑誌」だそうです。季刊で出ております。この『リクルートカレッジマネジメント』の編集部から電話がありました。この雑誌の「巻頭随筆」見開き二ページの執筆を依頼されました。

私は、理事長や事務局長どころか大学運営の理事もやったことがありません。そんな人間が、なぜ学長さんかなんかが書きそうな「巻頭随筆」を書くんだと聞いたたら、意外な話で、私が執筆することになる号の前の雑誌で「学生に読ませたい百冊の本」という特集を組んだんだそうです。その時に書籍の選考委員の先生方がたくさんの本を持ち込んで、載せるべき本を選ばれたのだそうです。その時に最後まで残ったのがこの本だそうで、完全に意見が二分したと言うんですね。一方に「これこそ我々が待っていた本だ」と積極的に推薦される先生がおられる。その一方で「何でこんなことを大学生に教えないといけないんだ」と猛反

対する先生の一群がおられる。これで完全に二分してこの本は不採用になりました。そのやり取りを編集者が横で聞いている、こんなに評価が分かれたのは初めての経験だ、一体どういう本かとゆっくり見てみたら、中身はまじめな本だった。そのため百冊に入れられないけれども、この本を書いた想いを書いてくれと頼まれたのです。「学習基礎技術の役割を重視する」という表題で書きましたが……出版当初はそういう評価でした。

ところが、この本を作ってみたら学生よりも教員の間で反響を呼びました。学生が直接買ってくれるよりは、一年生に基礎演習とか入門ゼミとか名前は色々ですが、そのテキストあるいはサブテキストにいいということで、先生方がほれ込んでご採用いただく学校が増えていきます。

四 学習基礎技術とは何か

この講義や本では何を教えようとしているのか、若干の例でお話しします。例えば、大学ではしょっちゅうレポートを書かせます。私は、一年生を終えるまでに「レポート」を命ぜられても怖がらないようにするのが基礎演習の最大の仕事だと考えています。それさえできるようになれば、安心して四年生までいけると思っているくらいです。学生

がレポートを怖がるあるいは嫌がる理由の一つは、「作文（あえて言えば綴り方）」と「レポート」の区別がついていないからだと見えています。この区別が曖昧なために、教員が「レポート」を出題すると、「高校では作文と言ったのを、大学では英語で言うのか」と思うだけで、中身は相変わらず作文の一種なんです。だから四百字詰めで五枚十枚となると大ブレイクが起きます。我々の方から言うと、学生のレポートが五枚や十枚でまとまるはずがないと思っていますが、「あんまり長いものを読まされるのはかなわん」という気持ちもありますから「五枚」なんです。ところが学生の方から言うと「五枚も書かなくてはいけません」となります。「三枚でもいいよ」というと大喜びになります。五枚になれば三枚分の文章がだらーっと長くなるだけです。五枚の方から言えば短い方がいいわけです。それではどう違うかというと、高等学校になると実際にはレポートも書かせていますが、小学校や中学校で書かせる「作文」というのは、感情とか想いを相手に伝える文章です。だから、非常に情緒的な色彩の濃い内容です。そんなものをだから読まされたら、読む方も書く方もかなわないですね。ところが、大学で要求される「レポート」というのは、事実とか裏付けのある意見を綴り合せる方法で、

何事かを主張する文章を要求しているわけです。

だから、作文の場合には「文章を書く」、レポートの場合には「文章を組み立てる」ことになります。それを「書く」つもりで臨んだら大変なお荷物になります。そうではなくて、必要な色々なパーツ（部品）を用意して、それを組み立てていくものだと教えます。そのため、作文の場合には事前準備とか資料収集というのは、どういうふうな言葉を使えるのかというメモくらいでいいのだけでも、レポートの場合には、何をどういうふうに書くのかという資料収集とか事前準備とかが大変重要なことを教えます。それさえ集まれば、あとはそのパーツをどう並べるかということだけで、極端に言えばそれに接続詞を入れていけば文章になる。だから、それは組み立てるといことだということをお教えしておけば、作文とレポートを誤解して、余分に負荷をかけることはありませんし、五枚書けといつてブリーイングを受けることも少なくなっています。

そういうことをきちんとさせることで、図書館へ行く必要性も理解されますし、レポートは気分・感情で書くものではなく、冷静に分析しながら組み立てるものであることを理解させます。その後は、多少上手下手がありますから場数を踏ませる必要がありますが、少なくともとば口でバ

リアーを作ってしまうとか、何回でも「長い綴り方」を書いてくるといふ事態は防ぎやすくなります。

次に、教員はよく「ノートを取れ」と言いますが、今の学生はなかなかノートを取りません。私もノートは取らせなければならないと思っておりますので、「なぜノートをとるのか」という話をします。「ノートを取るのとは後で見るためやろ。しかし、実際にノートを見るのは試験の前だけやろ。試験の前というのは短期間にあれもこれも勉強しなければならぬから、ノートを丁寧に見ている時間はないやろ。その時に役に立つノートでなければ、書き取ってもしょうがないやろ。それではどうしたらいいか」ということで、後は平凡な話ですが、「ノートは右の片方だけ使いなさい。講義が終わったら五分間だけ復習しなさい。何をするか。それぞれのパラグラフごとに記載されている内容を、単語でノートの左端に表示しなさい。一時間の講義なら普通は三〜四ページだから、五分もあれば充分だ」「そうしておくと、試験の前にノートの左端に注目して、ぱらぱらと繰ってみるだけで、自分が欲しいことがキーワードで出てくる。このキーワードは自分が作った単語だから中身はわかる。そこで必要なところだけ右側のページを読み直すということ、試験前の復習ができる。それで本当に試験

の前に実践的に役立つノートができる」と。

この話には続きがあつて、「ルーズリーフとノートの違い」を教えます。ルーズリーフというのはノートをカード化したものですから、「ルーズリーフの正しい使い方」「ルーズリーフの有効な使い方」を教えます。さらに、その続きで「カードの効用」「メモをカードにする有効性」「資料カードの使い方」というふうに話を進めます。カードの使い方は、大学では必須と思えるほど有効な記録法ですが、高校までではほとんど教わりませんから、すごく真剣に聞いてくれます。学習技術と言つてもこういう内容ですので、学生としては、先ほど言いましたように「これは聞いておかなければ損だ」ということになるようです。

もう一つ、ゼミがなかなか進まない、討論が成り立たないという悩みがあります。これについては、同じ人が何人か集まつて話し合つても、「会議」「討論」「おしゃべり」は全く違うという話をします。

例を言いますと、「会議」というのは「会して議する」ということです。これは何らかの結論を求めるための話し合いです。「討論」は「論をたたかわせる」ことです。「おしゃべり」の目的は暇つぶしですから、話に脈絡が無くてもその場が盛り上がりさえよければいいわけです。だから、

今やろうとしていることは、「会議」なのか「討論会」なのか「おしゃべり」なのか、そこを意識して話をするだけで話し合はずつと実りやすくなります。その中で、ゼミの性格はおおむね討論会です。ゼミを学生に発言させればよいという運営ではきわめて不十分だと思えます。

一方、教員の方もその点をはつきりしていないままに、良くしゃべる学生が出てくるとほつとする。そうでないと次々に「意見はありません」と下を向いている。一人言い出すと全部それになりますから、仕方なく時間が終わるまで教員がひたすらしゃべる。これでは教員・学生とも面白いわけがありません。ということ、例えばゼミの前に、こうした違いを理解させるだけで随分運営が違つてきます。

その結果、どういう学生が出来上がるかということですが、きょうは最近の四年生の卒業論文集を持つてきました。日本福祉大学の経済学部では卒業論文は選択ですが、ご参考にお回しください。私のゼミでは各学年とも調査を軸にして運営しています。これは今春私のクラスの一年生二十二人が作ったレポート集です。今年一月に阪神大震災から五周年を迎えましたが、私のゼミ（専門ゼミ）では阪神大震災直後から繰り返し神戸被災地の中小企業経営の実情を

調査してきました。復興過程で発生する様々な問題について継続調査をやっています。この年は一年生なんです、この程度の物(三分冊)は作ります。うちの学校では数年前から二年生と三年生で専門ゼミをやっておりますが、三年生は各班に分かれてやり、二年生はゼミの調査のやり方を教えなければいけませんので、全部共通のテーマで、同じ場所で行っております。これは昨年度の報告書で大学が開設されることによって地域の購買条件がどう変わるかという調査をやったレポートです。

【五】 大学と自分との関わり方を考える

この本は一年生に奨めていただいている学校が多いようですが、そうした中で本の使い方のノウハウや経験が、あちこちから寄せられます。最近共通しておりますのは、入ってきた新入生に「まず一番最後の章を読め」とお勧めになる先生が多いようです。最後の章を読めというのは『資本論』みたいでちょっと嬉しい感じがしますが…。

一番最後というのは「大学生活充実篇」です。その中に「大学生活を充実させるコツ」とか「自分を知らぬ方法」とか「大学を活用する」という節がありまして、そういうことを理解することで大学になじみやすくなると思えられる

からです。特に2の「自分を知らぬ方法」というのは、この大学が第一希望ではない学生に、それを早く吹っ切らせないと教育効果が上がりにくい、という問題に応えたものです。ほかの学校を受け直すわけでもないのに「本当はここに来たくなかった」と思いながら卒業期を迎えてしまう学生が随分います。それを早く吹っ切らせて、今いる大学の学生になったことを自覚させる必要があります。

一方では「五月病」や「就職の迷い」も切実です。「自分」というものに不安を感じはじめる、昔の哲学ほど深刻ではないのですがそういうことがありますので、「自分」を意識させる必要があつて、こういう方法を提示しているわけです。

以上のような考えからこの本を作ってみたのですが、さきに③のところでも具体的な例をお話ししましたように、こういう基礎技術を最初に教えた方が良いのではないか。そして、それは決して何もかも教えるとか、手取り足取り教えるのとは違う、ということを申し上げたいと思います。

これから大学も「全入時代」を迎えると、色々なレベルの学生に対応しなければならなりませんから、こうした「学習の基礎技術教育」を重視することが、いつそう必要になるのではないかと思います。